

家庭における絵本の読み聞かせへの幼児の反応 —1歳から5歳の発達的变化—

Young Children's Responses to Picture Book Reading at Home:
Developmental Changes in Children Aged 1 to 5

高井直美*・薦田未央**・
伊藤一美***・塘利枝子****
TAKAI Naomi, KOMODA Mio, ITOU Kazumi, TOMO Rieko

This study investigated young children's responses to picture book reading at home by their parents. Picture book reading programs have been carried out in several nursery schools. In this program, 379 children aged 1-5 were lent four picture books to be read for a month (one book per week). Their parents answered several questionnaires. The results indicate that the children's responses to picture books varied with age. The responses varied depending on the book they have read to older children compared with younger children. Further, the children's and parents' preferences for picture books depended on the stories in them.

Key words: developmental changes, young children, home, picture book reading

1. 問題と目的

(1) 乳幼児期の絵本の読み聞かせについて

乳幼児期の絵本を介した人との関わりは、子どもの認知、言語発達のみならず、人間関係の形成にも関係するものと思われる。絵本の読み聞かせは、多くの地方自治体における、乳児の家庭に絵本を配布するブックスタート運動（NPOブックスタート，2022）にみられるように、発達の早い時期から楽しい親子の関わりを促すとして、一般的に広く推進されている。実際に8割以上の乳幼児の家庭で、絵本の読み聞かせが行われているが、1週間に読む頻度には、毎日から1日まで家庭差がみられている（古相・岡本，2017）。

絵本の読み聞かせと子どもの言語発達については、Dowdall, Murray, Hartford, Melendez-

* 京都ノートルダム女子大学・現代人間学部・特任教授

** 京都ノートルダム女子大学・現代人間学部・准教授

*** 京都ノートルダム女子大学・現代人間学部・教授

**** 同志社女子大学・現代社会学部・教授

Torres, Gardner & Cooper (2020) のメタ分析によると、子どもの養育者に対して絵本活動を促す介入研究の効果が数多く示されてきた。そして、養育者が子どもと絵本を介して関わる経験が、子どもの発話や理解言語の発達を促し、さらに養育者の絵本を介する子どもとの関わり の能力を高めることなどが、明らかとなっている。

また、岡村・大森・西山 (2020) は、地方自治体などが行う子育て支援プログラムにおいて、親のみあるいは親子参加の、絵本の読み聞かせを促すプログラムが数多く実施され、支援の成果を上げてきたことを報告している。しかし、これらの支援プログラムに参加する機会がなく、普段読み聞かせ経験が少ない親も巻き込むような形で、絵本を介した子どもとの関わりを地域の子育て家庭全体に促すことも必要ではないだろうか。そこで、筆者らは、関西地方にある、保幼小連携のもと子育て支援に積極的に取り組む2地区（ここでの地区は中学校区）の保育園、こども園に研究協力を得て、筆者らが考案した「絵本の読み聞かせプログラム」を実施し、2019年度の予備研究とそれを改編した2020年度の絵本の読み聞かせプログラムの効果について検証した（高井・薦田・伊藤・塘, 2022）。

このプログラムでは、筆者らが協力園と相談して選んだ、各年齢群4冊ずつの絵本を1週間ずつ、園を通して家庭に貸し出した。そして、親を対象に、貸出前後と貸出中にアンケート調査を実施した。その結果、4週間の貸出後には、絵本を介した親子の関わりが増え、絵本への積極的な反応が増すなど、子ども側の変化に加えて、子どもの好きな絵本について理解し親自身が絵本に興味を持つようになるなど、親側の変化も認められた。また、子どもの年齢による、絵本への反応の違いも明らかになった（高井他, 2022）。ただし、ここでは絵本ごとの反応の違いについては、分析を行っていなかった。本研究では、子どもの発達に即した絵本とはどのようなものかについて検討し、家庭や保育現場における、絵本を介した子どもとの関わりへの参考になるように、絵本の読み聞かせプログラムで使用した絵本による違いについて分析した。

子どもにとって、望ましい絵本とはどのようなものだろうか。子どもの年齢に合った絵本選びについて論じている一般的な図書は数多くみられるが、研究としてエビデンスを基にして、子どもにとって望ましい絵本の特性について分析した論文は数少ない。たとえば、河村・馬場 (2021) は、長年日本で読み継がれてきた99冊の絵本を対象にして、絵本の対象年齢に応じた、オノマトペの量的質的变化について分析を行った。その結果、擬音語は低年齢対象の絵本で多く出現し、5、6歳対象の絵本では擬態語の出現比率が高くなるなど、絵本の対象年齢に応じてオノマトペの質的な変化がみられることなどが明らかとなった。その結果から、河村・馬場 (2021) は、子どもの興味を引き出すには、長く読み継がれてきた絵本を中核とする蔵書が望ましいと述べている。ただし、ここでは、絵本の分析のみで、絵本と子どもとの実際の関わりについては調査していない。

日本の代表的な児童書編集者であり、児童文学者である松居 (1981) は、「よい絵本は、作者の語りたいことが、子どもに伝わるように、目に見えるような言葉の組み立て方で語られ、それを受けて、言葉で表現されている物語の世界を、さし絵が、細部と全体を組み合わせ、言葉

と調和した形で表現しています」と述べている。また児童図書館員として、児童文学の翻訳や研究で長年活躍した松岡（2015）は、「よい本とは何か」に関して、本自体に「よい」「わるい」のレッテルをはることはできないこと、読者がその本をどのように受け止めたかによって、「よい本」が意味をもつことを論じた。

こうした児童文学者たちの意見から、ある絵本が、絵や言葉を通して子どもにどのように共感され、受け入れられたか、また読み手にもなる親がどのように感じたかが、その絵本の意義を知るうえで重要であると思われる。本研究では、筆者らがこれまでのプログラムで用いた絵本が、実際に、子どもや親にどのように受け止められたのかについて、親へのアンケート調査から検討することとした。

(2) 目的

筆者らによる絵本の読み聞かせプログラムは2019年度に3園で開始し、研究協力を得た地区の人々からの継続・拡大の希望もあり、毎年1園ずつ対象園を増やし、4年目の2022年度は、6園で実施を行っている。本研究では、2021年度に5園を対象に行った3年目の絵本の読み聞かせプログラムでの子どもと親の反応から、どの絵本が親子にとってどのような意味をもったか、絵本による違いの分析を行うこととした。

そのために、まず、年齢によって、絵本の読み聞かせ時の反応がどのように異なるのか、発達の变化を明らかにする。次に、各年齢で絵本の違いに子どもがどのように反応しているのか、分析を行う。そして、各年齢の子どもや親にとって、絵本が好まれる要因として、子どもの絵本への反応はどのように関係しているのか検討した。

(3) 倫理的配慮

研究実施に先立ち、京都ノートルダム女子大学の研究倫理審査委員会で承認を受けた（承認番号21-002）。そして、研究協力5園の園長の同意を得て、1歳児から5歳児のクラスに在籍する園児の保護者に文書での依頼を行った。研究への参加の任意性、個人情報には厳重に保護されること等を説明し、参加の同意書が提出された場合に調査を実施した。

2. 方法

(1) 対象者

対象者は、関西地方A地区の3つの公立保育園とB地区の2つの公立こども園の1歳児から5歳児クラスに在籍する園児471名のうち、保護者から研究参加の同意が得られた379名とその親であった。年齢クラスごとの人数、研究開始時の子どもの平均月齢（標準偏差）は、1歳児：58名、24.4ヶ月（3.3）、2歳児：61名、36.2ヶ月（3.3）、3歳児：78名、47.5ヶ月（3.7）、4歳児：84名、59.7ヶ月（3.6）、5歳児：98名、71.6ヶ月（3.6）だった。

(2) 絵本の読み聞かせプログラムの実施時期

2021年9月から12月の間に、各園で約1ヶ月間実施した。

(3) 使用絵本

使用絵本は、2019年度の予備研究で、まずA地区の3園において、園や地域の図書館司書の意見を参考にして、定番の絵本に新しい絵本を加えて年齢ごとに4冊を選定した。続いて2020年度は、B地区の1園も加わり、2地区で絵本の種類を変えて実施した（高井他，2022）。本研究の2021年度は、B地区でさらに1園加わったことから4園の実施になったが、園ごとに、これまでに使用した絵本のうち親子の好感度の高かったものに加えて、各園の希望も取り入れ、各年齢4冊の絵本を選定した。また、A地区の1園（1、2、3歳児のみ）については、8冊程度の絵本リストを用意し保護者が希望を選択する方法を取った。使用絵本のセットは園ごとに異なるが、共通して採用した絵本もあるため、絵本によって対象者数は異なった。用いた絵本は、5園合計で、1歳児11種類、2歳児12種類、3歳児12種類、4歳児10種類、5歳児9種類となった。

(4) 手続き

研究協力園を通して、保護者に研究への参加依頼を行い、同意者に事前アンケートを行った。その後4週間の絵本の貸出し、貸出中アンケートを絵本ごとに実施した。4冊の絵本の貸出しが終了した時点で事後アンケートを実施した。

(5) アンケート内容

アンケートは、事前アンケート、貸出中アンケート、貸出後アンケートの3種類を作成し、使用した。前年度のアンケートと内容は同じで、詳細は高井他（2022）に示したが、本研究では、貸出中アンケートの以下の項目を分析した。

1) 子どもの絵本への反応

①子どもは絵をじっくり見ていた（「絵を見る」と略。以下同様に略。）、②子どもは読み聞かせの言葉を真似した（「言葉真似」）、③子どもは絵本に触ったり、体を動かして楽しんだ（「手体反応」）、④子どもはストーリーを楽しんだ（「ストーリー」）、⑤子どもは文字（数字も含む）に関心を持ったり、自分で読んだりした（「文字数字」）、⑥読み聞かせ中あるいは直後に、子どもは自分から、感想を言ったり質問をしたりした（「感想質問」）、⑦読み聞かせ後の日常生活において子どもは自分からこの絵本に関して話をすることがあった（「生活話題」）の7つについて、反応があったものすべてを選択するように求めた。

2) 子どもの好感度とその理由

絵本を子どもは気に入っていたかについて、「①とても好き、②まあまあ好き、③あまり好きではない、④全く好きではない」から選択し、その理由について自由記述を促した。

3) 親の好感度とその理由

絵本を親は気に入ったかについて、「①とても好き、②まあまあ好き、③あまり好きではない、④全く好きではない」から選択し、その理由について自由記述を促した。

3. 結果

(1) 絵本への反応の年齢による違い

貸出中アンケートで、1人につき4冊すべての絵本に対する子どもの7種類の反応の出現数と出現率を、図1から図7に示した。図中の数値は、「反応あり」のデータ数（灰色地）と選択がなかった数（白地）である。

1) 絵を見る

図1に示したように、「絵を見る」は、どの年齢も高い反応率であり、出現率には、有意な年齢差はみられなかった ($\chi^2(4) = 0.412, n.s.$)。

2) 言葉真似

図2に示したように、「言葉真似」は、年齢が小さい方が多く出現しており、 χ^2 検定の結果、年齢差は有意であった ($\chi^2(4) = 57.103, p < .01$)。「反応あり」について、調整済み残差で ± 1.96 以上の有意な数値となったのは、1歳児 5.1、2歳児 2.6、5歳児 -6.0であり、1歳児、2歳児で有意に多く、5歳児で有意に少なかった。

3) 手体反応

図3に示したように、「手体反応」は、1歳から3歳で多く出現しており、 χ^2 検定の結果、年齢差は有意であった ($\chi^2(4) = 156.433, p < .01$)。「反応あり」の調整済み残差は、1歳児 6.4、2歳児 4.8、3歳児 5.2、4歳児 -7.7、5歳児 -6.8であり、1歳児、2歳児、3歳児で有意に多く、4歳児、5歳児で有意に少なかった。

4) ストーリー

図4に示したように、「ストーリー」は、年齢が高くなると多く出現しており、 χ^2 検定の結果、年齢差は有意であった ($\chi^2(4) = 41.457, p < .01$)。「反応あり」の調整済み残差は、1歳児 -4.8、2歳児 -2.2、5歳児 4.7であり、1歳児、2歳児で有意に少なく、5歳児で有意に多かった。

5) 文字数字

図5に示したように、子どもが「文字数字」は、年齢が高くなると多く、 χ^2 検定の結果、年齢差は有意であった ($\chi^2(4) = 124.664, p < .01$)。「反応あり」の調整済み残差は、1歳児 -7.3、2歳児 -5.5、4歳児 5.0、5歳児 6.7であり、1歳児、2歳児で反応が有意に少なく、4歳児、5歳児で有意に多かった。

6) 感想質問

図6に示したように、「感想質問」は、年齢が高くなると多く、 χ^2 検定の結果、年齢差は有意であった ($\chi^2(4) = 97.974, p < .01$)。「反応あり」の調整済み残差は、1歳児 -8.4、2歳児 -3.3、3

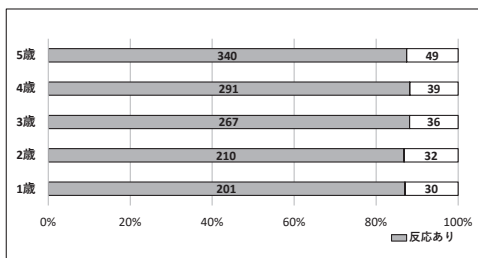


図1 絵を見る

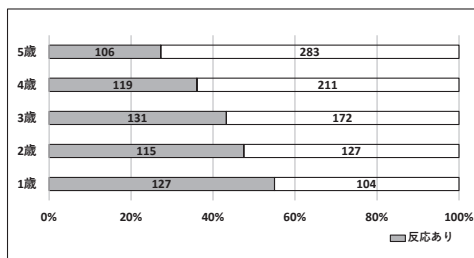


図2 言葉真似

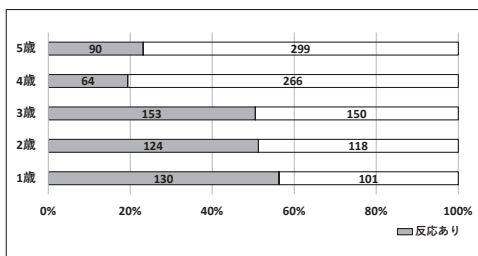


図3 手体反応

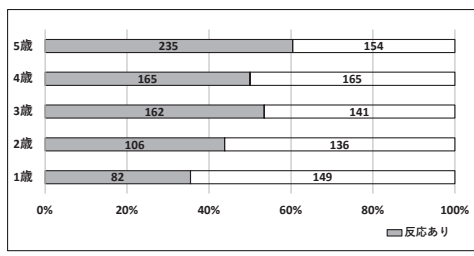


図4 ストーリー

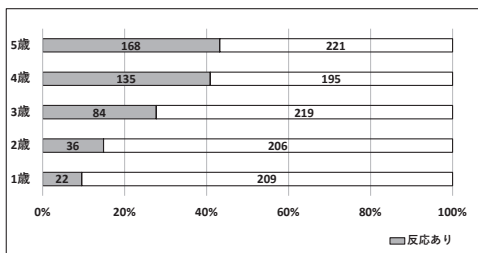


図5 文字数字

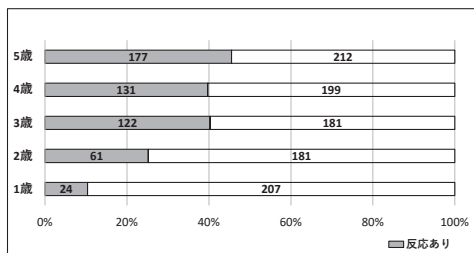


図6 感想質問

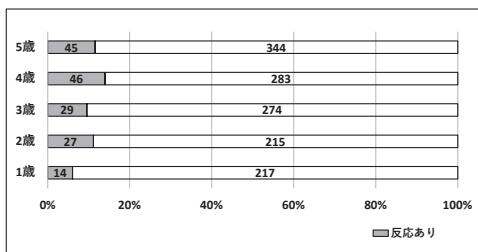


図7 生活話題

歳児2.4、4歳児2.3、5歳児5.3であり、1歳児、2歳児で有意に少なく、3歳児、4歳児、5歳児で有意に多かった。

7) 生活話題

図7に示したように、「生活話題」は、 χ^2 検定の結果、年齢差は有意であった ($\chi^2(4) = 9.606$, $p < .05$)。「反応あり」の調整済み残差は、1歳児 -2.5、4歳児 2.1であり、1歳児で有意に少なく、4歳児で有意に多かった。

(2) 絵本による反応の違い

年齢ごとの絵本は、園によって使用絵本が異なり、園児数も異なるため、各年齢でデータ数が20人以上ある中で上位5冊（2歳のみ4冊）を取り上げて、絵本による反応の違いをみる量的分析を行った（付表1に、引用絵本リストを掲載）。以下、年齢ごとの結果を示す。

1) 1歳児の5冊の絵本への反応

1歳児でデータ数が多かったのは、『くっついた』44人、『バスがきました』32人、『おつきさまこんばんは』24人、『きれいなほこ』24人、『ちょんちょんちょん』24人であった。これらの5冊への子どもの反応について、出現比率に差が見られるか、 χ^2 検定で調べた。

絵本ごとの各反応の出現比率は、図8に示した。図の頂点では、「絵を見る」は「絵」、「言葉真似」は「言葉」、「手体反応」は「身体」、「ストーリー」は「話」、「文字数字」は「字」、「感想質問」は「感想」、「生活話題」は「生活」と表記した（以下の図表でも同様）。

いずれの反応についても、 χ^2 検定で絵本による有意差は認められなかった。また、子どもと親の各絵本への好感度については、「とても好き」から「全く好きではない」を3点から0点とし、それぞれの得点について、5冊の絵本に差がみられるか、1要因分散分析を行ったが、有意差はみられなかった（子の好感度 $F(4,144) = 1.602, n.s.$, 親の好感度 $F(4,145) = 1.209, n.s.$ ）。

2) 2歳児の4冊の絵本への反応

2歳児でデータ数が多かったのは、『さかながはねて』44人、『パンダおやこたいそう』43人、『ノラネコぐんだんおすし屋さん』39人、『はらべこあおむし』37人で、これら以外の絵本は20人以下であったため4冊で分析した。絵本ごとの各反応の出現比率は図9に示したが、 χ^2 検定では、絵本による有意差は認められなかった。また、子どもと親の好感度について、4冊の絵本に差がみられるか、1要因分散分析を行ったが、有意差はみられなかった（子の好感度 $F(3,157) = 1.283, n.s.$, 親の好感度 $F(3,158) = 1.080, n.s.$ ）。

3) 3歳児の5冊の絵本への反応

3歳児の絵本でデータ数が多かったのは、『あっちゃん あがつくたべもの あいうえお』47人、『ぜったいにおしチャダメ?』34人、『ちょっとだけ』34人、『とこちゃんはどこ』32人、『くだものさがしもの』26人であった。絵本ごとの各反応の出現比率は図10に示した。「身体」「話」「字」については、 χ^2 検定の結果、絵本による差は有意であった（「身体」 $\chi^2(4) = 40.519, p < .01$, 「話」 $\chi^2(4) = 13.340, p < .05$, 「字」 $\chi^2(4) = 9.999, p < .05$ ）。残差分析の結果、「身体」反応は、『とこちゃんはどこ』『ぜったいにおしチャダメ?』『くだものさがしもの』で多く、『あっちゃんあがつくたべもの あいうえお』『ちょっとだけ』で少なかった（調整済み残差は順に、2.8、2.7、2.3、-2.2、-5.0）。「話」反応は、『ぜったいにおしチャダメ?』で多く、『くだものさがしもの』で少なかった（調整済み残差は順に、2.5、-2.4）。また、『とこちゃんはどこ』で「字」反応が少なかった（調整済み残差 -2.2）。

子どもと親の好感度について、4冊の絵本に差がみられるか、1要因分散分析を行ったところ、有意差はみられなかった（子の好感度 $F(3,157) = 1.283, n.s.$, 親の好感度 $F(3,158) = 1.080, n.s.$ ）。

4) 4 歳児の 5 冊の絵本への反応

4 歳児の絵本でデータ数が多かったのは、『しりとりにしましょ! たべものあいうえお』69 人、『ぐりとぐらとくるりくら』64 人、『11 びきのねことへんなねこ』45 人、『バムとケロのさむいあさ』44 人、『バムとケロのそらのたび』39 人だった。絵本ごとの各反応の出現比率は図 11 に示した。「言葉」「話」「字」については、 χ^2 検定の結果、絵本による差は有意で（「言葉」 $\chi^2(4) = 16.692, p < .01$, 「話」 $\chi^2(4) = 26.773, p < .01$, 「字」 $\chi^2(4) = 24.596, p < .01$ ）、残差分析の結果、「言葉」反応は、『しりとりにしましょ! たべものあいうえお』で多く、『バムとケロのさむいあさ』で少なかった（調整済み残差は順に、3.6、-2.3）。「話」反応は、『バムとケロのさむいあさ』『バムとケロのそらのたび』で多く、『しりとりにしましょ! たべものあいうえお』で少なかった（調整済み残差は順に、2.4、2.3、-4.8）。「字」反応は、『しりとりにしましょ! たべものあいうえお』で多く、『ぐりとぐらとくるりくら』で少なかった（調整済み残差は順に、4.6、-3.0）。

子どもと親の好感度について、5 冊の絵本の差がみられるか、1 要因分散分析を行ったところ、いずれも有意差がみられた（子の好感度 $F(4,255) = 4.543, p < .01$, 親の好感度 $F(4,251) = 5.777, p < .01$ ）。Tukey 法による多重比較の結果、子の好感度については、『バムとケロのそらのたび』と『バムとケロのさむいあさ』が『ぐりとぐらとくるりくら』に比べて、いずれも 5% 水準で有意に好感度が高かった。親の好感度については、『バムとケロのそらのたび』と『バムとケロのさむいあさ』が『ぐりとぐらとくるりくら』と『しりとりにしましょ! たべものあいうえお』に比べて、いずれも 5% 水準で有意に好感度が高かった。

5) 5 歳児の 5 冊の絵本への反応

5 歳児の絵本でデータ数が多かったのは、『ごきげんなめのでんとうむし』98 人、『しりとりのだいすきなおうさま』97 人、『なぞなぞのみせ』46 人、『しょうぼうじどうしゃ じぶた』42 人、『ともだちや』42 人であった。絵本ごとの反応の出現比率は図 12 に示したが、「言葉」「身体」「話」「字」は、 χ^2 検定の結果、絵本による差は有意であった（「言葉」 $\chi^2(4) = 43.973, p < .01$, 「身体」 $\chi^2(4) = 17.790, p < .01$, 「話」 $\chi^2(4) = 13.419, p < .01$, 「字」 $\chi^2(4) = 16.981, p < .01$ ）。残差分析の結果、「言葉」反応は、『しりとりのだいすきなおうさま』で多く、『ともだちや』『ごきげんなめのでんとうむし』で少なかった（調整済み残差は順に、6.6、-2.2、-2.9）。「身体」反応は、『ごきげんなめのでんとうむし』で多く、『ともだちや』で少なかった（調整済み残差は順に、3.8、-2.1）。「話」反応は、『しりとりのだいすきなおうさま』で多く、『なぞなぞのみせ』で少なかった（調整済み残差は順に、2.5、-2.6）。「字」反応は、『しりとりのだいすきなおうさま』で多く、『しょうぼうじどうしゃ じぶた』で少なかった（調整済み残差は順に、3.8、-2.2）。

子どもと親の好感度について、5 冊の絵本の差がみられるか、1 要因分散分析を行ったところ、子の好感度のみ有意差がみられた（子の好感度 $F(4,320) = 4.282, p < .01$, 親の好感度 $F(4,318) = 1.685, n.s.$ ）。Tukey 法による多重比較の結果、子の好感度については、『しりとりのだいすきなおうさま』が『ごきげんなめのでんとうむし』『ともだちや』『なぞなぞのみせ』に比べて、いずれも 5% 水準で有意に高かった。

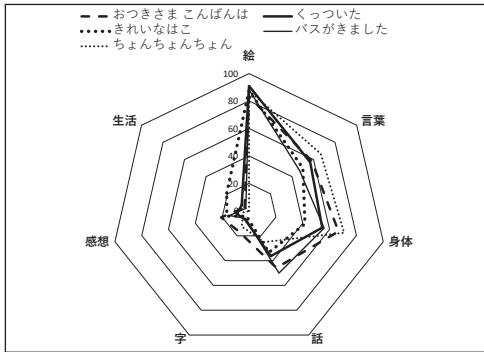


図 8 1 歳児の絵本への反応

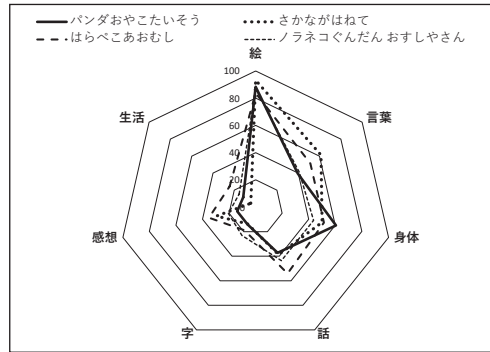


図 9 2 歳児の絵本への反応

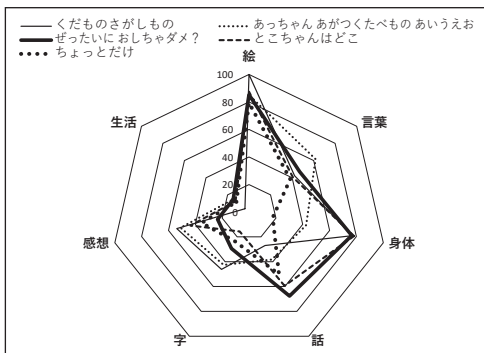


図 10 3 歳児の絵本への反応

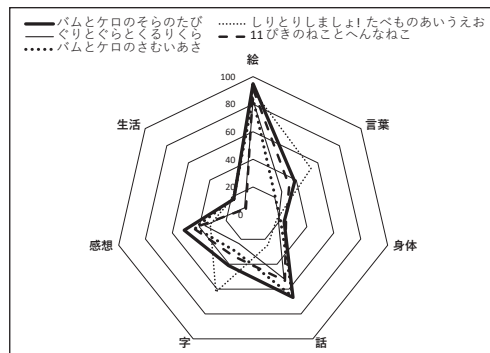


図 11 4 歳児の絵本への反応

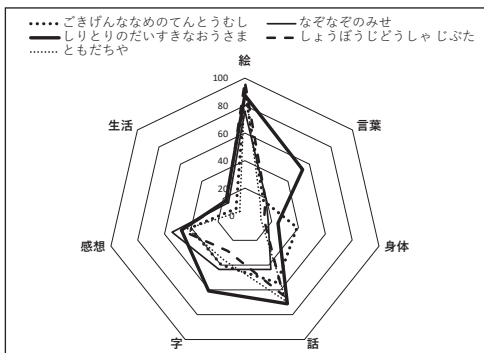


図 12 5 歳児の絵本への反応

注) 同心の七角形の平行線は 20% の幅であり、内側から 20%、40%、60%、80%、100% の反応率を表す。

(3) 絵本への反応と子どもおよび親の絵本への好感度との関係

子どもと親の好感度の得点については、年齢ごとに、使用したすべての絵本データを合わせて（絵本の種類は、1 歳児 11、2 歳児 12、3 歳児 12、4 歳児 10、5 歳児 9）、各好感度得点を従属変数に、「絵」「言葉」「身体」「話」「字」「感想」「生活」の 7 つの反応の有無を独立変数とする重回帰分析（強制投入法）を行った。

その結果は表 1 に示したが、子どもの好感度において、有意となった独立変数は、標準化係

表1 子どもの好感度・親の好感度を従属変数とした重回帰分析の結果

1 歳児	子ども好感度				親好感度				
	非標準化係数		標準化係数		非標準化係数		標準化係数		
	B	標準誤差	ベータ	有意確率	B	標準誤差	ベータ	有意確率	
絵	0.440	0.121	0.210	0.000	0.190	0.115	0.103	0.100	
言葉	0.270	0.090	0.193	0.003	0.185	0.086	0.149	0.033	
身体	0.328	0.087	0.234	0.000	0.157	0.083	0.127	0.060	
話	0.233	0.093	0.161	0.013	0.320	0.089	0.248	0.000	
字	0.153	0.141	0.065	0.277	-0.002	0.134	-0.001	0.985	
感想	0.020	0.136	0.009	0.885	-0.083	0.129	-0.041	0.521	
生活	0.096	0.169	0.033	0.569	0.076	0.161	0.030	0.635	
自由度調整済み R^2 , 回帰式有意確率			0.261	0.000				0.149	0.000

2 歳児	子ども好感度				親好感度				
	非標準化係数		標準化係数		非標準化係数		標準化係数		
	B	標準誤差	ベータ	有意確率	B	標準誤差	ベータ	有意確率	
絵	0.174	0.118	0.083	0.141	0.057	0.107	0.032	0.596	
言葉	0.263	0.084	0.189	0.002	0.225	0.078	0.185	0.004	
身体	0.193	0.082	0.138	0.019	0.081	0.076	0.067	0.286	
話	0.450	0.083	0.320	0.000	0.356	0.077	0.291	0.000	
字	0.068	0.115	0.034	0.558	0.023	0.107	0.013	0.830	
感想	0.124	0.096	0.078	0.195	0.063	0.088	0.045	0.477	
生活	0.172	0.128	0.078	0.181	0.115	0.118	0.060	0.334	
自由度調整済み R^2 , 回帰式有意確率			0.270	0.000				0.175	0.000

3 歳児	子ども好感度				親好感度				
	非標準化係数		標準化係数		非標準化係数		標準化係数		
	B	標準誤差	ベータ	有意確率	B	標準誤差	ベータ	有意確率	
絵	0.414	0.109	0.198	0.000	0.280	0.104	0.149	0.008	
言葉	0.112	0.076	0.082	0.139	0.093	0.072	0.076	0.198	
身体	0.310	0.073	0.228	0.000	0.152	0.069	0.126	0.028	
話	0.264	0.071	0.195	0.000	0.189	0.068	0.157	0.005	
字	-0.010	0.084	-0.007	0.906	0.000	0.080	0.000	0.995	
感想	0.141	0.075	0.102	0.060	0.164	0.071	0.133	0.022	
生活	0.284	0.120	0.124	0.018	0.148	0.113	0.073	0.192	
自由度調整済み R^2 , 回帰式有意確率			0.223	0.000				0.121	0.000

4 歳児	子ども好感度				親好感度				
	非標準化係数		標準化係数		非標準化係数		標準化係数		
	B	標準誤差	ベータ	有意確率	B	標準誤差	ベータ	有意確率	
絵	0.522	0.102	0.247	0.000	0.130	0.108	0.061	0.230	
言葉	0.029	0.073	0.021	0.687	-0.090	0.077	-0.064	0.243	
身体	0.016	0.085	0.009	0.854	0.070	0.090	0.041	0.435	
話	0.326	0.067	0.239	0.000	0.446	0.070	0.326	0.000	
字	0.181	0.069	0.131	0.009	0.245	0.073	0.177	0.001	
感想	0.315	0.069	0.226	0.000	0.209	0.072	0.150	0.004	
生活	0.187	0.100	0.095	0.062	0.216	0.105	0.110	0.041	
自由度調整済み R^2 , 回帰式有意確率			0.273	0.000				0.209	0.000

5 歳児	子ども好感度				親好感度				
	非標準化係数		標準化係数		非標準化係数		標準化係数		
	B	標準誤差	ベータ	有意確率	B	標準誤差	ベータ	有意確率	
絵	0.152	0.100	0.071	0.128	0.123	0.088	0.069	0.165	
言葉	0.276	0.077	0.173	0.000	0.135	0.068	0.101	0.048	
身体	0.059	0.079	0.035	0.459	0.063	0.070	0.045	0.369	
話	0.358	0.071	0.247	0.000	0.302	0.063	0.248	0.000	
字	0.153	0.070	0.107	0.031	0.052	0.063	0.043	0.405	
感想	0.087	0.069	0.061	0.207	-0.030	0.061	-0.025	0.621	
生活	0.235	0.106	0.106	0.028	0.162	0.095	0.087	0.089	
自由度調整済み R^2 , 回帰式有意確率			0.191	0.000				0.106	0.000

数が高い順に、1歳児では、「身体」「絵」「言葉」「話」、2歳児では、「話」「言葉」「身体」、3歳児では、「身体」「絵」「話」「生活」、4歳児では、「絵」「話」「感想」「字」、5歳児では、「話」「言葉」「字」「生活」であった。どの年齢も複数の反応が、好感度の要因となっているが、すべての年齢に共通していた要因は、「話」であった。

また親の好感度については、有意となった独立変数は、標準化係数が高い順に、1歳児では、「話」「言葉」、2歳児では、「話」「言葉」、3歳児では、「話」「絵」「感想」「身体」、4歳児では、「話」「字」「感想」「生活」、5歳児では、「話」「言葉」であった。すべての年齢に共通していた要因は、親の場合も「話」であった。

4. 考察

まず、図1から図7の結果より、年齢によって、絵本による反応のしかたが変化していることが窺えた。これらの発達の变化は、概ね、高井他（2022）の前年度のデータでも示されており、今回の分析で再度確認されたと言える。1、2歳児では、発声の真似や手や体による反応が多くみられ、絵本の読み聞かせに対して、全身でアクティブに反応しているのに対して、4、5歳児では、絵本の内容に関心を持ち、感想や質問を言い、自ら文字を読もうとする反応が見られるようになってきている。これは思考の発達や、文字への興味の表れと考えられる。また、3歳児は、1、2歳児と同様に身体による反応が多いが、一方で感想や質問の増加がみられている。1、2歳児と4、5歳児の特徴をそれぞれ部分的に併せ持っていることから、3歳児では、親子の関わりで絵本を楽しみながらも、子ども自身が主体となって絵本に関心をもち始めており、それは、子どもの内部に言語的思考が発達している移行期の表れではないかと考えられる。

次に、本研究で新たに示されたのは、3歳以降、絵本の特性によって、子どもに異なる反応が生じたことである。3歳児では、図10と残差分析から、「身体」反応が多い絵本3冊（『ぜったいにおしチャダメ?』『とこちゃんはどこ』『くだものさがしもの』）と少ない絵本2冊（『あっちゃん あがつくたべもの あいうえお』『ちよっとだけ』）に分かれた。前者の3冊は、子どもが絵に触れたり、絵の中から人や物を探したりすることを求める絵本である。こうした絵本の特性に基づいて、身体を使ったやり取りが、大人と子どもの間で活発に行われたことが窺えた。また、4歳児では、図11と残差分析から、『しりとりしましょ!たべものあいうえお』で「言葉」「字」反応が多くみられた。この絵本は、絵とその物の名前が文字で示され、読み手にしりとり遊びの展開を促す構成になっている。絵本についての自由記述では、日常でも「しりとり」を楽しんでいる時期で、絵を見ながら親子でしりとりを楽しんだ回答が多く寄せられた。5歳児では、「言葉」「身体」「話」「字」において、絵本による差が有意となり、多くの反応で絵本差が見られた。たとえば、「身体」反応の多かった『ごきげんななめのとんとうむし』は、時間の経過とともに、絵本をめくっていく仕掛けが施されており、そのような絵本の特性に子どもは反応したと思われる。

1、2歳児の絵本にも、たとえば、『ちょんちょんちょん』や『パンダおやこたいそう』など「身体」反応を引き出しやすい絵本は複数あったが、図8、図9に見られるように、1、2歳児のデータでは、反応のバリエーションや出現率が3歳以降に比べると少なく、絵本による反応の差が、有意差が見られるほど顕著ではなかった。

また、好感度の分散分析からは、4歳児と5歳児では、絵本差が有意だった。4歳では『バムとケロ』の2冊が、子どもにも親にも好感度が高かった。これらの絵本は、図11と残差分析から「話」への反応が高いことがわかった。特に『バムとケロのそらのたび』では図11で「感想」の割合も高く、好感度の理由を示す自由記述では、絵の中から子どもが面白さを発見していることや、ストーリーに強い関心を持って、様々な感想を述べていることが書かれていた。5歳では、『しりとりのだいすきなおうさま』で子どもの好感度が高かったが、図12と残差分析より、この絵本は、「話」「言葉」「字」への反応が高いことがわかった。好感度の理由の自由記述では、ストーリーの面白さに惹かれて、言葉の真似をし、「しりとり」遊びを、家族で楽しんだことなどが書かれていた。4歳と5歳の好感度の高い絵本に共通していることは、子どもがストーリーへの興味を強く抱いた点にある。

そして、すべての絵本のデータを分析の対象とした、親と子の好感度に関する要因についての重回帰分析（表1）では、年齢ごとに有意となる独立変数の組み合わせは異なっていたものの、すべての年齢および子どもと親の好感度に、「話」が影響していることが示された。話、つまりストーリーへの反応は、発達的变化をみた図4では、低年齢の1、2歳児では量的には多くは見られなかったが（図4）、好感度への影響要因となっている結果は、大変興味深い。また親の好感度については、すべての年齢で「話」が最も大きく影響していた。先述したように、松岡（2015）は、読者がその本をどのように受け止めたかによって、「よい本」が意味をもつと述べていたが、本研究の結果から、どの年齢においても、絵本のストーリーの楽しさが子どもや親に十分伝わるのが、絵本を受容することにおいて、重要ではないかと考えられる。そして、絵本間の反応の違いが明確になるのは、3歳以降であることから、3歳児では、絵本の特性に対応した、子どもの側の主体的な反応が増加し、4、5歳児において、絵本への反応のさらなる分化や、「好きな絵本」の明確化につながるのではないかと推察される。そして、こうした3歳以降の発達的变化の基盤となるのは、図2と図3に示された1、2歳児に見られる、読み聞かせへの発声の真似や、手や体によるアクティブな反応ではないだろうか考える。

最後に今後の課題について述べる。筆者らが本プログラムで、使用してきた絵本は、長年定番になっている絵本に加え、協力園の保育者の意見も取り入れた新しい絵本も含まれていた。そして、前年度行ったアンケート結果を参考にして、子と親に、広く受け入れられる絵本を、継続的に採用するように努め、絵本の選択には試行錯誤を繰り返してきた。その際、それぞれの年齢に合った親子の関わりが生じやすい絵本は何か、追求してきた。しかし、本プログラムでの絵本の選び方に、偏りがある可能性は否めない。

また、今回、絵本による反応の違いは、データ数が各年齢で比較的多かった絵本に限って、分

析を行ったが、分析に含めなかった絵本の中にも、子どもや親の好感度が非常に高い絵本もあった。親子の関わりを促したり、子どもの言語、思考の発達を促したりする絵本の特性については、今後も絵本の種類やデータ数を増やし、さらなる検討が必要と考える。

そして、乳幼児期から親子関係を育むツールとなり、子どもの絵本への興味や好奇心を育てる絵本の読み聞かせを、地域社会で支援していくことは、今後も継続・発展することが望まれる。

5. 引用文献

(1) 引用文献

Dowdall, N., Murray, L., Hartford, L., Melendez-Torres, G.J., Gardner, F. & Cooper, P.J. (2020) Shared Picture Book Reading Interventions for Child Language Development: A Systematic Review and Meta-Analysis. *Child Development*, **91**, 383-399.

古相正美・岡本満江 (2017) 保育園・幼稚園に通う乳幼児の家庭における絵本読み聞かせの実態. 中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要, **49**, 25-34.

河村あゆみ・馬場美友 (2021) 読み聞かせを支える絵本のことばの質の検討 特別支援センター研究紀要, **14**, 31-39.

松居直 (1981) 私の絵本論 国土社

松岡享子 (2015) 子どもと本 岩波新書 岩波書店

NPO ブックスタート (2022) ブックスタートとは <https://www.bookstart.or.jp/> 2022年8月29日

岡村幸代・大森弘子・西山修 (2020) 地域子育て支援における母親支援を志向した絵本の読み聞かせの可能性と課題. 読書科学, **62**, 12-25.

高井直美・薦田未央・伊藤一美・塘利枝子 (2022) 幼児の家庭における絵本の読み聞かせプログラムの効果 保育学研究, **60**, 391-402.

(2) 引用絵本リスト

付表 1 引用絵本リスト

年齢	使用絵本	制作者	出版社	発行年
1歳	くっついた	三浦太郎	こぐま社	2005
	バスがきました	三浦太郎	童心社	2007
	おつきさま こんばんは	林明子	福音館書店	1986
	きれいなはこ	せなけいこ	福音館書店	1972
	ちょんちょんちょん	かしわらあきお	ひかりのくに	2011
2歳	さかながはなて	文：中川ひろたか 絵：森あさ子	世界文化社	2019
	パンダおやこたいそう	いりやまさとし	講談社	2017
	ノラネコぐんだん おすしやさん	工藤ノリコ	白泉社	2015
	はらぺこあおむし	作：エリック・カール 訳：もりひさし	偕成社	1976
3歳	あっちゃん あがつくたべもの あいうえお	原案：みねよう 作：さいとうしのぶ	リーブル	2001
	ぜったいに おしちゃダメ？	ビル・コッター	サンクチュアリ出版	2017
	ちょっとだけ	作：瀧村有子 絵：鈴木永子	福音館書店	2007
	とこちゃんはどこ	作：松岡享子 絵：加子里子	福音館書店	1970
	くだものさがしもの	はらぺこめがね	PHP 研究所	2017
4歳	しりとりしましょ！たべものあいうえお	さいとうしのぶ	リーブル	2005
	ぐりとぐらとくるりくら	作：中川李枝子 絵：山脇百合子	福音館書店	1992
	11 びきのねことへんなねこ	馬場のほる	こぐま社	1989
	バムとケロのさむいあさ	島田ゆか	文溪堂	1996
	バムとケロのそらのたび	島田ゆか	文溪堂	1995
5歳	ごきげんななめのてんとうむし	作：エリック・カール 訳：もりひさし	偕成社	1998
	しりとりのだいすきなおうさま	作：中村翔子 絵：はたこうしろう	鈴木出版	2001
	なぞなぞのみせ	作：石津ちひろ 絵：なかざわくみこ	偕成社	2011
	しょうぼうじどうしゃ じぶた	作：渡辺茂男 絵：山本忠敬	福音館書店	1966
	ともだちや	作：内田麟太郎 絵：降矢なな	偕成社	1998

注) 絵本ごとの分析に使用した引用絵本のみ掲載した。掲載できなかった 2021 年度の使用絵本の一部は、高井他 (2022) で示した 2020 年度プログラムの使用絵本リストにおいて掲載されている。

謝辞 本研究の実施にご協力をくださった保育園、こども園の先生方、保護者と園児の皆様に、心より感謝申し上げます。

付記 本研究は、JSPS 科研費 JP19K03245 の助成を受けた。研究題目「小学生の学習適応に関する幼児期の環境とその支援効果について」(平成 31 年度～令和 3 年度)